

土屋 正義 編輯

繪本石山軍記

第二編

五

特  
遠  
2269  
15



14  
2269  
15

石山軍記二篇卷之五目錄

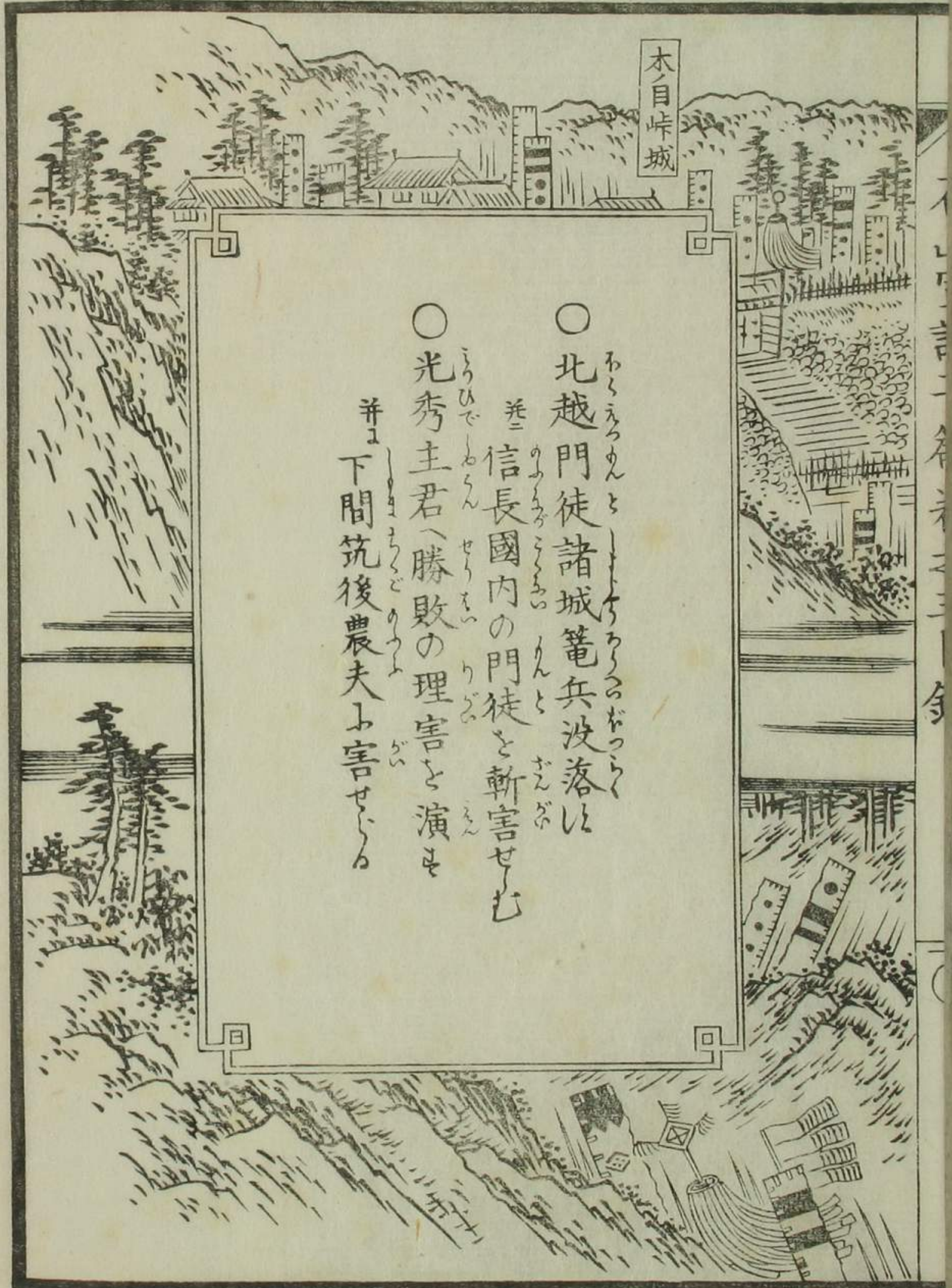


繪本石山軍記第二編卷之五目錄

- 勢州長嶋え信長再軍馬茂進む
- 信長大軍と牽て越前の門徒と征む
- 門徒の僧俗諸城茂固む

火打山城

南无阿弥



木目峠城

○北越門徒諸城籠兵没落は  
北越門徒諸城籠兵没落は  
信長國內の門徒と斬害せむ

○光秀主君へ勝敗の理害と演せ  
光秀主君へ勝敗の理害と演せ  
下間筑後農夫小害せむ

繪本石山軍記第二編卷之五

土屋正義 編輯

○勢州長寫(再軍馬)と進む共信長欺て門徒と塵と

從三位參議平の信長卿は天正二年四月上旬より攝州石山と攻給を

雖も要害堅固の勝地なる上軍師良臣謀略と施し防戦怠慢なく働

きりれば容易落べく着(ざり)程に夫々附城の手配と做置五月廿七

日泉州堺と立て本國岐阜へ歸城在(が)介歸路あ於ても門徒一揆が屢

亂妨狼籍止ざり(づ)信長愈御憤り深く右に左此宗門の輩と思ふ終

に蔓(ら)置(び)天下政道の障碍多(く)殊に勢州長嶋門徒一揆の争戦起

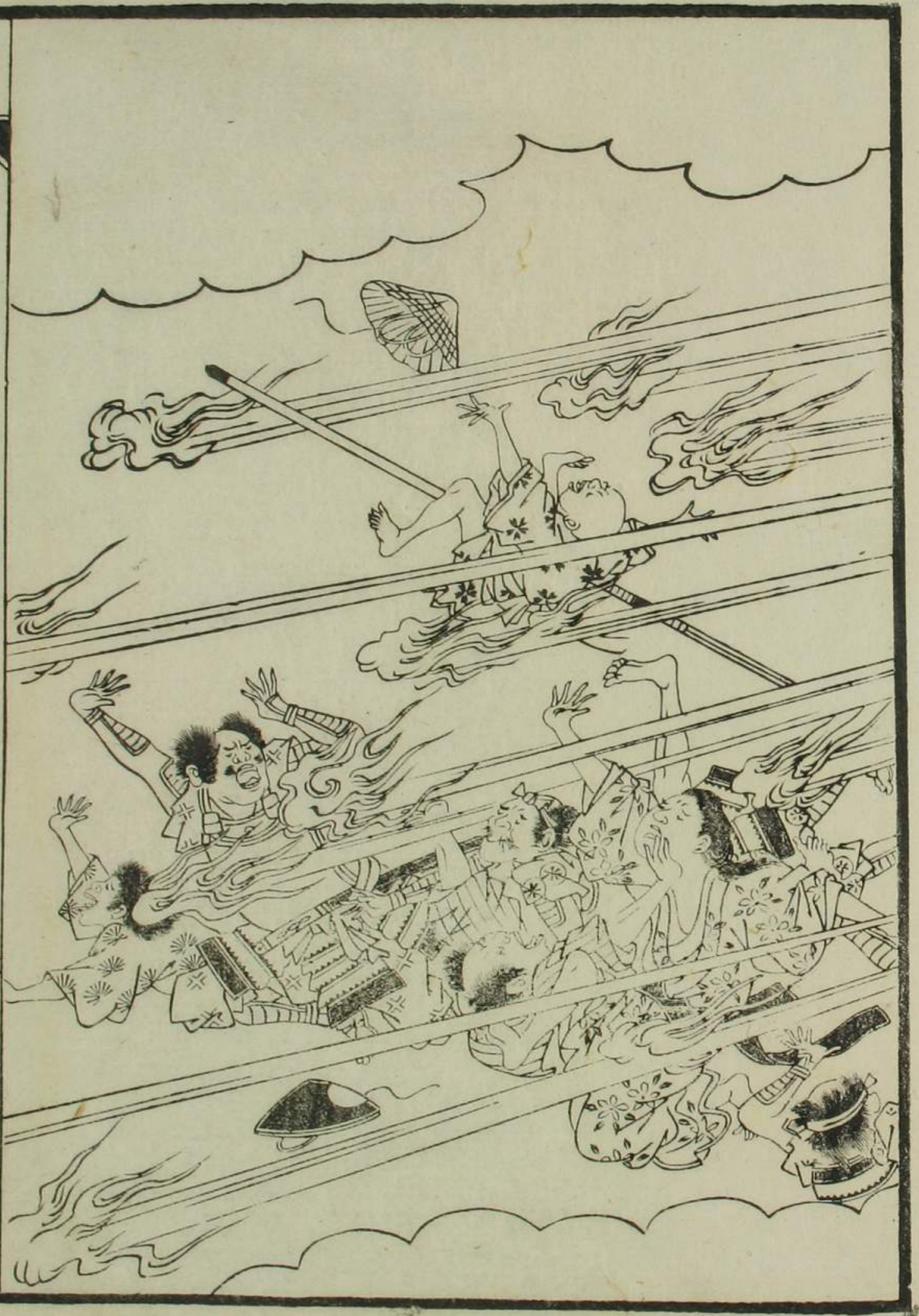
せ(し)根本を先是と討平(び)ぬと七月十三日岐阜城と出陣あり今般是

非根と斷枝葉と枯さんと信雄信孝の勢も催促あり総軍凡十万余騎  
と將て三方街道より押寄給ふ抑這長嶋と謂る地の勢州桑名郡良の隅尾  
張と美濃に相狹き岐蘇の大川大垣の時田川多度川の季と三面に請南  
の伊勢の海原遠く八重の汐路と相隔り然程に隣國の浪人懶陸者此地  
と憑と躬と倚し今般の二揆の時得し心地に郷民們と鼓舞して城廓と  
構堀柵鹿角木と結廻し兵糧手厚く楯籠り信長是迄出馬有とも敢て  
勝利を得給がりしが年來無念に思えし故今般の等閑に怒り置いと諸國  
在番の侍大將まで呼寄りて引卒し給ふ最も江加小谷の秀吉許りの越前の  
門徒と押の為其儘小谷に在城せし猶中河内江州伊賀郡北園街の押として木の木  
木の木より中河内行程四里百下に磯野丹波守秀昌阿閉淡路守と置て堅く守らせ借長嶋御進發に

付秀吉舎弟木下秀長と代り人数と差添遣されり佐久間右門尉信盛  
天王寺の旅營と松永に預け長嶋進向の御供に従ふ亦稻葉伊豫入道徹齋  
も樓の岸對ひ城と老臣に守らせ是も長嶋御供奉致さる先勢尾の加島口へ  
向ふ入ら佐久間信盛柴田勝家稻葉徹蜂谷頼隆四家の逞兵押寄るに松の  
木松の木の渡り長島東北隅の海濱の渡り門徒們相支へ鳥銃と擊懸る繚雨の如し織田勢疲負成  
亡多しと雖も事共せず大河と渡り總勢鎗と入て突崩し門徒亦數百人突殺  
さる勢も棄て城地に進向信長後陣の諸將と段々進り城と鐵桶の如く取圍  
う一揆方の屬城篠橋太鳥居の兩處に織田大隅守信廣氏家左京亮經國伊  
賀守光俊飯沼勘平等の軍勢を以て把圍し石火砲と擊崩し散々に攻詰りけ  
れ城も籠り門徒の輩降参せと庶幾も信長更に許容給ふ本願寺門徒

の見懲目の為一個も残さず打殺せし用捨なく無二無三に攻入兩城男女二千余  
人太情多し斬殺しける徳と総軍長嶋城に共寄三日の間昼夜と今づ荒手と入  
替々攻立れば城中大さき疲れ苦み大將長圓寺使者を以て信長卿誤つて稟  
しける俺們本山の退轉と哭しむ余り逮びなき揆と相企て既に力盡落城迎く  
覚候元來城中に籠る男女の者此方の指揮に恃り難く信長卿對し奉りて  
怨し進ま心底曾て之を拙僧個の指令に應じ是非の辨別も多し前後忘却し  
籠城致せし者們多し庶幾寛仁の御許を以て拙僧並に大將分の者稟し譯の  
為自害仕へく余の者助命許され生々世々の仁惠忘るべきと歎願述べ頼  
むれば信長故意面と和げ長圓寺稟し條神妙く早々大將分生害と遂げ首級  
と當陣送り城中の男女助命の願は許し得させしと申度さる使者城中へ立歸

りて如き々の由と話説れ大將長圓寺大きに歡び人皆信長と鬼の如く恐れ  
姦雄虎狼の將と謂ども人木石に非ざると憑り助くる佛心有今城中の男女  
助命に遭故郷歸る一方ならん十死一生と得る惠を亦此上残心なく念佛  
唱腹割切て死しむれば余餘大將分の者共に僧に誓妙寺俗井口九郎  
大夫高松文吉等列んで屠服せしめ城内の男女僉涙と流して余波と惜むれ  
亦哀れなり聽て談四個の首級と討て信長の本陣へ送り届け城門押開きて籠  
居の男女籠と放る小鳥の如く我もくと羣り出つ南とて趨り去と信長卿ハ  
嚮に長嶋一揆に舍弟信治と害られ辱憤胸に散る時を郷民鄙夫鄙女の  
者までも舍弟信治の怨敵と思へ得る安隱に助くべきやと平日に心に思ひれ  
ば今長圓寺と甘味欺謀急に堤の上に兵と伏て五千挺の鳥銃と押並(羣集)



信長偽て  
長鳴城  
中の一揆  
男好と  
鑿みふん  
圖



て逃出る最中二度に火蓋と切て放るれば百雷の雲間より飛下りも猶恐怖しき震動激声煙の中に三千餘人的と成てぞ撃倒さるる哀れと云も愚けり生残り多門徒們は遁せんとすと大きに怒り噫人外鬼畜の信長奴助命と許さ唇も干ぬ間に掌の裏反て非道の成敗右ても左ても死ぬ命おれ信長奴に喰ひ付て焦熱地獄引立行や手柄次第に幽殺せよと突竟の郷民們二千餘人信長の本陣は目懸面も振を斬入つ命限りと悪戦をまに素肌武者なる郷民をれど死と一致して暴廻れば討ども突ども痿痺をまて織田の軍卒應ひて三町許り引退く然共織田勢大軍をれば一揆と八方より押圍余さし者と亂れ合二時許り戦ひつるが雙方陣死其數を知らざ

就中信長卿の叔父あり織田大隅守信廣と始り族津田市之助信成同く舎弟仙千代同く五郎市同く孫十郎織田伴左三門の衆士亦外外様の勇士お於へ赤見左衛門佐坂井七郎左衛門尉佐治左市佐藤民部梶原平治宮地助三郎福富万藏荒川新八郎等有名の衆人三十餘員一揆の爲に陣死する次お雜兵七百餘人討れたる一揆方悉く陣死して僅に三百餘人討殘され一方の血路と切脱走し十町許り引退く處へ毛ふる駒に乗る武者只一騎追懸来り既に余間近着ければ大音と上て呼りける様へ汝們魚の網洩る鯉魚の如く何國より逃課せざらん俺は先刺陣死し給ふ津田市之助信成の乳夫子小瀬三郎治郎清長と云者へ主君の先途と着遂に後れ聊吊ひ合戦せん

と欲へば汝們其儘に遁まぐらむと一々今世の暇と把せて我主従の死  
出の案内地獄巡りと致さしと呼び多々駒躍らせて一揆の中蒐  
入つて當る任せ斬捲りなれば即坐す七八個難倒さる後に續ける敵も  
者へり一揆の郷民們踏止まり織田家の倍臣小賢しくも吊ひ合戦の  
優き哉主諸共に冥途と急ぐ望み不任して引導授けん帖んで仕  
舞と八方より矢玉と放ちて囲はれば茲と最期と覚悟の清長射  
とも撃とも素利く拂ひて近寄敵に脚も蹴飛し組落さんと寄着  
敵の鎧の上帯引摺りて群敵目的に人礫と一死と極めたる忠士の勇  
銳暴ふ暴立尔勢へ馬摺尊神の働きも斯と有らんと思はれり  
誰が撃懸る鳥銃成り一固の銃丸飛來つて腰骨深く撃込は

ね強勇剛氣の清長なれども鞍高し坐し居るを仰向に反て  
真逆さぬふ大地に撞地落る處と敵の郷民透さるる蒐寄遂に首とが  
打落るる恁る處織田方の軍將佐久間信盛手勢と引卒一揆の打  
漏され追伐せんと暴風の吹如く起り来る一揆の郷民們躲るに道りく  
再び打對ひつて戦ひけるが數日の籠城遁る間もなご平場の敵に圍  
まり物ゆめ躬と憇ふべき陣所もなく素より一同疲れ果て漸に勇氣  
も衰へければ只逃課せんと思ふ人多く倒つ轉びつ遁れんとま佐久間  
信盛味方に指揮して門徒一揆の根絶しなれば二個にても取逃すべから  
む主君信長の御錠と畏伏手柄次第に塵あせよと大音放つて呼ぶ  
ければ指揮に隨ふ兵卒們此處に追寄彼處に責込菜刀で楯木を



切裂如く情用捨も多し打殺しなれば逃途なれば土堤の上より河  
中へ飛入死まも多りき残兵三百余人皆悉く誅戦争に責殺しな  
べ信長多年の鬱憤と晴し長嶋の城へ落城し訖ぬ茲に於て勢北の  
仕置定むれ原の如く城屬の所領として北伊勢五郡の分地と添ら  
れ瀧川左近一益お賜り同く十月五日軍勢を纏り本國美濃にぞ  
還軍し給ふ威勢の程あは凄冷りりり

○信長大軍を牽て越前の門徒と征む并に門徒の僧俗諸城を固む  
然程お天正も早三年と成春過夏暮て初めの秋文中旬に逮びりら  
江州小谷の城主なる木下藤吉郎秀吉の主君信長卿の免許を蒙り  
叙位任官諸臣賜り秀吉も羽柴筑前守と改稱を偕這より越

前の國秀吉密に間者を入れて諸處の風色聴しむ処國中種々の内亂起り  
て本山石山の家司末寺と門徒の郷民們不平に逮び遂に双方兵端  
を開き亦々國中騷擾ふる先其縁故と尋ね視るに嚮に桂田富  
田滅亡の後の越前一國へ末寺の坊主と門徒の郷民們的私議と以て思  
ふが儘の心組の處石山本寺より指揮に依て下間筑後法橋と越前の  
守護代と申す杉浦壹岐法橋と大野の郡司と登用し筑後が一子  
和泉守と足羽の郡司と定められ七里三河守と上方の押へに府中  
の辺と處領し與へ湯の尾の城相守らせ亦一揆の郷民們は國中の  
諸納所の金穀半以上納し半所得す然有る半國を領すに當  
んと定む末寺よりも所領乞と末寺の門徒檀那の施力と以て渡世

と爲が常法として敢て採用せざらんば依之寺々の坊主們へ無領無  
得と鼻に懸て郷民們と奴僕の如く召使ひ以外の外の應接せし郷民  
們心に憤りつ坊主達は後世と社頼り下僕仲間の如くこと遣これ  
荷と擔ぎ狭管の下に眼とむ身攻使らるべきの処謂はる俺們粉骨碎  
身もして當越前と切隨へも國郡自儘にせゆく欲ひ故之然ると  
本山より指揮と下し様々の者出来る而已ならず國と押領もつは  
那緯どやと邑々打集りて衆論亦もや一揆の党と企て右も左も下  
間杉浦と始め寺々の諸坊主們と喉口を悉く攻殺し國中思ひの  
儘に横行せんと何方も評議一決して諸方の一揆門牒し合せ彌其年  
七月十九日八重巻寺と謂に馳聚り下間筑後陣處豊原寺へ押寄

んとぞ議しりりる下間筑後徳と聽よりも悪き一揆們が舉動も急  
ぎ逆寄して打散せと若林長門守と大將として八重巻寺へと差遣  
し終に雙方勝連寺暇手に於て一場の合戦にぞ速びたる亦東郷安  
原村と謂地の鎗講の者們蜂起して八月上旬下間和泉守が構ふる  
足羽が陣處へ押寄攻戦ふ然る國中の諸民屢苦と困窮の巷といふ  
りりりる羽柴筑前守秀吉の間者を入れて耽于聽把今ぞ越前門徒們的  
征伐時節致来せりと早速岐阜城へ注進するして片時も御出馬然る  
と詳に轉末言上せし信長殊に待兼給へ即時に陣觸る給ひつ  
は最も常の軍令は十六戈以上の者とい出陣すべきの定められど一向坊  
主土民們もれば手苛き合戦の有るべき故に軍着習ひの爲に今般の

十四戈以上の少年名具をべしと命せ出され天正三年八月十二日信長岐  
阜の城と進發し給ひ相從ぐる諸將の面々先鋒の第一番として越  
前國案内者なれば惟任日光守光秀次に柴由修理進勝家惟住五郎左  
衛門長秀羽柴筑前守秀吉長岡兵部大輔藤孝佐々内藏助成政  
原田備中守長年戸次右近政原荒木攝津守村重以下總て三万六千  
余騎大將信長卿の旗下に稲葉伊豫入道徹齋父子瀧川左近將監  
一益池田勝三郎信輝同く嫡子藤九郎之助前田又左衛門尉利家  
蜂谷兵庫頭頼隆安藤伊賀守不破河内守桑原等と宗徒の勢と  
て三万余騎之後陣に北畠信雄神戸信孝織田七兵衛信登以下二万余騎  
都合七万八千余騎之亦若狹路より粟野越中守同く弥四郎逸見駿

河守熊谷傳左衛門尉山縣下野守白井民部兼松宮玄蕃允同  
く左馬助内藤筑前守畑田修理少進寺井源左工門尉香川右衛  
門大夫等一萬八千餘人其餘丹波丹後兩國の勢に一色左京大夫  
義定數百艘の兵船に取乗越前北浦押寄り民屋と放火し焼立  
ければ本願寺の家司下間筑後此由聽より大きに仰天し御民們以  
催促りたるに敢て與属る者も有む織田の軍勢雲霞の如く山嶽  
峰々に充滿して勢天をも貫く形勢なれば門徒の郷民們恐怖戦き  
溪の底林の蔭と索り逃躲ると專一して防ぎ戦つんと為る者もあ  
下間筑後愈困怵して先居合せざる兵を分ちて懐つぬ迄も防ぐな  
しと江越の國境ありける虎杖山の城要害として下間和泉守と大

將と一采の照見寺宇坂の本向寺該兩僧と副將とあり二千余人  
と属て楯籠らせ木の目嶽火打嶽に和田本覺寺石田の西光寺三  
千餘人の兵と相添鉢伏の城に杉浦壹岐速比橋立の真宗寺大町の  
專授寺阿波賀三郎等二千余人今條火燧山の城に海川新道川の  
二流れ余落合とさき塞ぎて要害堅固に相構え下間筑後添橋藤  
島の超勝寺荒川の興行寺四千余人府中の龍門寺に於て三宅權之  
熙八千余人中河内には七里三河守八百余人河野新城に若林長門  
守親房子息新五郎親次安井右衛門尉稻村治大夫二千余人籠城  
あせり亦杉津口の城に大鹽の圓光寺と大將と一塚圖書山林左近  
五十井瀬右工門尉是等二揆の野武士にして各勇功顯はせし輩あり

り其他游士堀江中務熙景忠と始めとあり神波七兵衛三園采  
女等一隊の首領として四千余人最も大切の地として大夫に構へて  
懸り同く廿四日織田家の大軍敦賀の表へ着陣し大將織田信長  
に武藤總右衛門尉館に入らせ給ひ諸勢都合十萬人敦賀表に居  
餘りれば江北鹽津の邊まで續きつり恣て柴田勝家の杉津口へ我手  
と以向ひ度吉信長卿願ひれば請に任せて許されしは勝家大きに  
打歎びて柴田宮内少輔同く伊賀守同く監物佐久間玄蕃柴田源左  
衛門尉徳山五衛尉近藤無市杉江彦四郎毛受勝助拜卿五左五  
門尉安井左源次と始めと一究竟の勇士五千餘人を引卒あり  
てぞ打立なる

○北越門徒諸城籠兵没落を并び國內の門徒を斬害せしむ  
 然程に今十四日の未明より大雨盆を覆ふ如く終日小止み降連  
 る程に晩方に諸處の谷川水増て恰も滝津瀬の如く流れ人馬の往  
 来も絶々ありしが羽柴筑前守秀吉は是幸ひの時節ありと河野新  
 城へ向ふとて信長卿言上しければ信長速に許容有て兵船の準備  
 と指揮せられて惟任日向守光秀稲葉伊豫一徹齋入道山崎源左衛  
 門家長と添らるる秀吉一番に船に飛乗河野浦へと漕出ぬ副將  
 の人々も續いて乗船し戌の刻に敦賀と漕出し艦拍子揃へて走ら  
 せらるる子の上刻に河野浦へ各船着岸仕りければ少選此処にて  
 息と懋り翌十五日の拂曉に逮び新城さしてを押寄にる這時

秀吉指揮して云やう兵船悉く敦賀表へ漕戻せ一艘も此浦に置か  
 りらむ秀吉に於て再び船お把乘引退く人と思ふ心ならず逃んと思へ  
 る者のほかに此海底の水屑と成て憶病の名を遁るべしと云捨真先  
 に進んで推寄る當城の大將若林長門守親房同く子息新五郎  
 親次の武邊功者の勇士あるは防禦の準備嚴に構へ兵士持場々々  
 と堅め待懸り秀吉惟任に對して稟す様方々の自是木の目鉢  
 伏の兩城へ何方にても心任せに寄給へ當城への某一手にて向ふ  
 ても然るべくんと云惟任答へて曰是迄一緒に寄るが未だ當城の落  
 去も着む他へ別れ行んの本意に非ず殊に貴殿の勢許りにては君  
 命に恃れる罪分解す相共に敵城に進み戦ひ有無の勝負と果

上引別るべしと答へし秀吉聴て押ても望まざ然ら右も  
左も從ふべし最も敵の若林長門守本願寺の門徒の中にも武勇  
の名を取武士あるが侮つて軍仕損ずべし隨分味方の兵士損はる  
き様敵と偽引出して討把べき各々の箇様々に做給へて計策を  
示し合して憑りければ惟仕稻葉の心得候ふと秀吉の謀る處に從  
ひたりひたり介後秀吉ひたり加藤虎之助ひたり清正ひたり十五ひたり福島市松正則ひたり十五ひたり兵桐助ひたり作  
堀尾茂助ひたり吉晴ひたり三ひたり脇坂甚内ひたり安治ひたり二十ひたり蜂須賀小六ひたり家政ひたり十八ひたり彦右五ひたり這  
壯者們に密謀と謀り含み兵士六百人と屬添て路の左右に埋伏を  
しり借亦舍弟小市郎秀長に中村彌助藤井又太郎青木勘兵衛  
等に三百余人と相屬何方も郷民の容体に打扮せ紙旗紙幟と差

上遙に後より押寄來らせ秀吉の惟任稻葉山崎等と一手に成て  
二千餘人引卒し河野の新城へ押寄つ関と作り鳥銃と擊懸を  
とと亂して攻寄る勢として操りければ城の大將若林長門守候  
設ける絆は有れば些しも動せず士卒を励まし大木大石を投  
懸々々力と戮して防戦あせむ故意寄手の鯨波と作り嚴く鳥銃擊  
懸あせむ城近頃の士卒と進ませる唯防戦の矢石に恐れ怖るる色  
目とあして着せむに若林新五郎安井右衛門等血氣に逸る壯  
者あれば寄手の柔弱着るる不吉や夫駈出して追捲れやと勇と舉  
て出んと為ると長門守堅く制して是を許さむ弥堅固に防がせむ  
は故寄手も戦ひ疲れし体にて暫し猶豫折しも有異の方より一

羣の軍勢紙籬紙幟さして三四百人寄手の後把切人と馳懸るる那  
 者成やと之と看れば籬も幟も真宗の佛名南無不可思議光如来と  
 大文字に墨黒々と書りし者共當城の後詰  
 ふまゝと覺りし何國の者們ふんと怪し佛敵法敵餘を減ま  
 と呼る聲々夥しく無二無三に暴入るるに織田方大きに仰天一隊伍  
 四度路に把亂散々に成て敗走るる城中の兵士等之と看て正疑  
 ひふき一揆の援助之討て出力と戮せんと一同競ひ立て實と思ふに  
 若林新五郎安井右衛門尉何時まで猶豫見物すべき速打出入  
 と聞きければ若林長門守も今更に推止むべきに非ざれば切てい  
 ぞと指揮する程に城門八文字に颯と開かせ新五郎真先に蒐出

るにぞ長門守も看るに忍びず同く續て駈出し新五郎討まを  
 者共と寄手の中へ突てへば羽柴稻葉惟任山崎が勢共一戦にも速  
 ばぞ狼狽廻り散々に逃出し若林父子の勝に乗て十町許  
 りも追立ちながら長門守急度注意敵兵腕く逃様ふす社那と動揺  
 心得難く尙くの敵の謀計ふんと心着より大音を發ちて死地に偽  
 引の計畧ふん速く引や壯者們と呼止むれ共何が偕勝誇りける  
 瘳として耳にも懸む追行り長門守の氣を焦燥し引や深入るる  
 と呼る處へ一聲の鳥銃響くや否や羽柴が伏置加藤福嶋片桐堀  
 尾蜂須賀脇坂以下究竟の勇士の輩撰すぐつて六百餘人群々發  
 と起り立て大勢の敵中へ切て入つ手的に任せて討倒しければ長

門守者の敵の謀計にて引入るぞ打破つて城に入や疾々引よと呼  
 立ると加藤の壯子們之と看より若林と思ひければ我討把んと圍  
 みたると長門守の聞ゆる勇士手練を盡して戦ふ程に羽柴が勢も猛  
 しと雖も左右ろく是と破り得ぞ追つ追れつ戦ふ處へ羽柴惟任  
 稻葉山崎大濤の激が如く取て覆せば若林父子安井右門尉茲  
 ぞ一世の大事の場所一足も引ての耻辱之撃や衆人斬や者ども數返  
 し合せて戦ふ様の實に項王が垓下の軍も斯や有んと思はる合  
 戦數刻勝負を分るるなり然共若林方の一揆ゆへ織田の勇兵  
 們に捲立られ騎者歩兵も損亡多く終に四方に崩れて敗走す  
 若林父子大きに敦田言甲斐ふき味方の敗容る返し合をて

駈散せよやと呼勵ませども耳にも懸を其上今迄馬の左右に近よ  
 ほと省一揆の農民正しく加勢と思ひの外合號の炮聲響くと等  
 く立地長門守と追把卷前後左右より突て係れば長門守親房大  
 きに驚き汝們加勢に來る郷民あまや那謂俺と敵とまらや血  
 惑ひる哉と罵憤れば農民們嘲笑つて曰く愚や若林確乎承り候  
 郷民の門徒と看せし我門の羽柴筑前守秀吉が舎弟同苗小市郎  
 秀長と始り郎等淺野青木の何某とと呼りて斬て係れば若林  
 父子倍々驚き多勢の圍を破るに術なく主従三個同く枕に陣死  
 依之稻村治大夫安井他力之助河嶋波太郎以下恩顧の郎等一個  
 も残らば陣死ある斯の如く大將若林と始り名有人々陣死せし



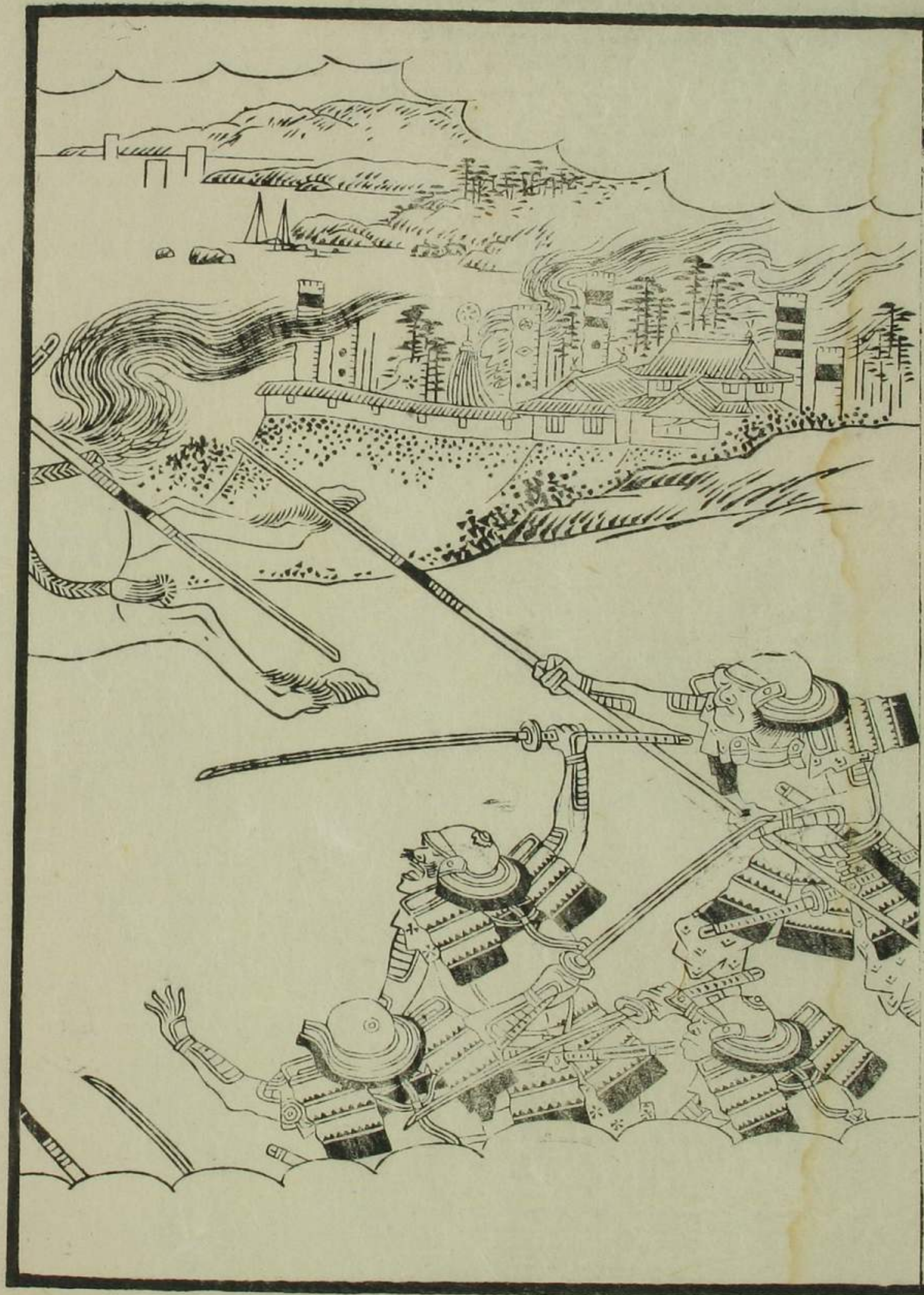
若林父子戦死  
河野新城落  
城あり

若林長門守



石山軍記二篇卷之五

十五



石山軍記二篇卷之五

十五

べ城中に残り居るの共い思ひく、逃失て河野新城忽ち落去し、  
秀吉が手へ討取若林父子安井等の首級と始り、稻村安井河嶋の  
首級に虜五百餘人と添て主君の本陣送り遣り、惟任稻葉山寄  
の三將の木の目峠鉢伏と責落さんと面々勢と引分押寄より羽柴  
秀吉は是よりして龍門寺と攻落さんとて手勢と引具へ進み、柴  
田修理進勝家の同月十五日未明より杉津口の城に押寄より城中  
の大鹽の圓光寺と大將として大勢籠りしが加勢に來り、堀江  
景忠は其初め朝倉譜代の家臣より義景と怨り仔細ありて居城  
の本庄に楯籠り謀逆の聞へ有はり、義景討手と差向攻に、然る  
景忠協力を越前と脱走し加賀國へ落行る處に加州門徒們景

忠と賞美し軍師とありて尊敬盡せし景忠も加州に安居し、  
が今般下間杉浦の兩個と景忠不平の條出來るより、諛戦争を  
幸端として當城圓光寺に加屬し、織田家へ降参すべき旨と  
武藤總右衛門尉と頼之信長に音信を通しければ、柴田の手勢五  
千餘人押寄りて持楯竹東と衝列べて、搦に搦で攻上るに堀江景忠塚  
圖書等裏切して城門と押開き得たりと、柴田勢亂れ入柴田が  
甥佐久間盛政は城將圓光寺と渡り合終り、刺勝圓光寺の首を取  
城中の羣民們悉く撫斬し、城に火と懸焼立たり、光秀一徹齋の  
向ひる木の目峠火燧が嶽の城より和田本覺寺石田の西光寺三千  
餘人を楯籠りたるが河野落城せしと、杉津の火の手に恐れて防ぐ

勢ひもろく寄手嚴く攻詰れば終に兩將自殺とありて木の目火  
打も落城するに茲も同じく焼立にたり自夫直ちに鉢伏嶽に押寄  
る城將杉浦壹岐專修寺真宗寺の三個織田勢の猛軍に壁易く  
て一戦も速む城と棄て蜘蛛の子散る如く逃失たり惟任稻葉の破  
竹の勢同國府中とさして進發す羽柴筑前守秀吉の前に府中にお  
し進みは龍門寺の城を圍み攻る城將三宅權之丞主従八雲時の惚  
へ防戦せれども羽柴が向ふに敵すべし三宅は終に陣死して半日の  
間に落城してたり談由敦賀の本陣へ注進を信長卿大に悦び給  
ひ同く十七日御本陣と龍門寺へと移され諸方の勝軍を聞て名大  
まに勇まて曰ひたつ予年來悪くと思ふる加賀越前門徒の揆

們忽ち今日お討にせし心地宜よ尚殘黨男女と論ずば探索捕  
縛して用捨あく塵として予が憤りと暗らむべしと指揮有れば羽  
柴秀吉諫めて稟しける御憎しむ御最もに候共兼富る頭人們殺  
しあは残れり御免恕加へられ寛大の仁政を願は候ふ微細お  
穿鑿して暴殺せば君と不仁の大將として世上の口は端に懸らんも  
無念之輩も君の領國と成首り之國人助命に屈伏まべしと詞と竭  
して止めけれ共信長一向に聽入給はる越前西方越智山北の庄口山  
家原崎の邊へ原田備中守不破河内守佐久間甚九郎安藤伊賀守  
笹岡兵庫助二萬余人と二隊とを郷村洩さざり捕しむ又中  
河内口へ向ふ人への柴田修理進羽柴筑前守惟任日向守惟任五

郎左衛門尉稻葉一徹齋の輩三万五千余人にて先鳥羽の城と一  
 時に攻落し九頭龍舟橋森田長崎金澤の庄まで一揆此門徒と斬  
 棄々々押通る又一隊の前田又左衛門佐々内藏助瀧川左近將監武  
 藤總右衛門尉三万余人大野郡宅食三保河内表と斬廻る其外  
 金森五郎八原彦次郎が輩都合勢十萬餘人にて國中四方に  
 別れ押寄城廓砦と攻落し一揆の家と焼立々々男女老少と言つ切  
 殺し突殺し山林に逃躲るると追廻し此処の溪間彼処の藪原富の  
 狭間樹の蔭迄も尋ね捕て刺殺し氣殺しに狩盡し々々人は人種絶  
 ると思われは目も當られぬ分野なり斯れ寺院坊舎民屋賣  
 店宗派の者のト居の家宅に放火して焼立ければ是亦火の地獄道

に陥るが如し十五日より十九日まで五日の間に討る僧侶和田  
 本覺寺大鹽圓光寺大町專修寺同く舎弟治部卿了漸橋  
 立の真宗寺石田の西光寺宇坂の本向寺藤嶋超勝寺荒川の  
 興行寺久米の照嚴寺金が崎の祐海真栗の瑞性森田比由疑  
 湊の正薰渡邊の了珍南居の正船稻村念佛之助天屋吉藏等  
 の勇士と始め或ひの誅し或ひの虜り數百人の僧俗首級を刎  
 られ其子其孫從類不至るまで遁る者更にあく斬害せら  
 らるもの山の如く亦虜の者の袖より袖え繩と通して珠數撃  
 とし百個繩五十繩幾連と夫々木符と附て番兵に添信長卿  
 の本陣へ引渡し名前人數帳面に相託し恰ら瓜の蔓はくくは

が如く根葉と断して亡す程に着る人膽と令して恐怖聽者魂  
と失ふて絶倒も凡坊主首の數七百餘級一揆郷民の首壹萬三  
千餘級斬屠りたる男女の數の幾千萬と云數は知れ信長卿  
此由と聞い名て實氣味よき繚哉と曰ひける抑加賀越前此  
兩國の去る長享二年よりして今天正三年迄八十八年の間本  
願寺の所領多かりるに信長一時に攻取らる繚全く世の變革  
の瑞相あるべし

○光秀主君勝敗の理害を演義下間筑後農夫に害せらる

恁て織田信長卿の同く二十三日一乘が谷豊原寺に陣と移され柴  
田丹羽明智惟羽柴稻葉戸次瀧川等と先鋒とて金津  
北国街道 越前板北

郡の細呂木同郡金澤より加州へ亂入能見江沼の兩郡を切把て味方の  
領地として仕置と定め猶奥深く切入んと為ると秀吉之と制して  
曰様遠國に來て數日人馬と疲し諸兵一日の休暇もあらず不案内の  
敵地に深入せし繚衆軍禍と招く根あるべし加州の者に越前と同  
く郷民の生質勇壯して軍事塾達の剛者多く假令一揆ありと  
も慢るべからず加之越前征伐の容子と聴加州の方にも攻入ると豫  
て余準備し構え居ん然有処へ味方の勞兵を以て進み向ん繚宜し  
あらざ銳氣を避て余脱氣を討て追て心易く討得る時あり加州の  
進發今に限らざる候ふ各得与賢考し給へと智辯の詞に諸大將達  
如何様最も同すも亦の亦の大將の御指揮を受て恁敵國に進む

の際に速び中途よりと扯歸しなば嘸御不興の御咎り受んと衆評  
一皮せざるんば然らつて一個御本陣へ引返し勝敗の理と言上りて其上  
にて御指揮に随けんと遂に評定極まりなき誰か扯返し此一條と  
大將言上まきと議と羽柴秀吉稟しけり某罷り取り伸き人の  
易し併些く存する旨の候へば明智殿御取り有て宜しく言上願  
り候ふと云光秀も秀吉の確論拒むべき處多く思ひなれば如何  
様某罷り歸りて程能言上仕りて進退決着計急しとそ手者十  
餘人を引卒つ一乗が谷へ引返して豊原寺の本陣へ参上し進退の  
利害と演古し多分疲兵の味方を以て一揆より共暴手に當らば士卒  
の損亡甚しうぐり殊も味方地の利も不案内に必勝討入の時節と

考へ御軍馬進り給はんは良全の軍略に候ふべしと忠言盡して言  
上せしむ信長公も最もと思し召然らば加越の境に要害と構え  
大將者残り留り帰城をさぬと思ふれば加州の津浪大聖寺  
に両所の城郭と相築き戸次右近と大將とを佐々權右衛門  
尉堀江中務丞馬彌右衛門尉と籠置て万事の戸次へ相談し内  
外警衛怠るまじと夫々明智へ指揮有るんば光秀畏りて再び引  
上り細呂木の陣所へ立歸り諸將へ君命稟し傳えて戸次以下の三  
士と残り余餘の諸將の陣と拂ひ越前北の庄あを集合あま大將信  
長卿にも九月三日一乗が谷より北の庄より足羽の山に陣を移され頭  
て當國の仕置と沙汰し給ふ抑越前國の北陸道の要地にして最も大

切の場所おてあれは尋常の者護るべき地に非ず謂に柴田勝家に  
賜り北國の管領と爲給へり然れ共敦賀郡の部の武藤總右工  
門尉ふ賜り同國大野郡三分二の金森五郎八下賜り三分一  
の原彦治郎に賜り柴田に属て與力となし亦府中の城に十萬石  
と附て前田利家佐々成政不破氏仲に宛行ひて是と府中の三人  
衆と号し越前國の目監となして同く柴田が與力とせられ且  
柴田が居城と定む處は足羽郡北の庄と然るべしと境川前田惟  
任三人と城普譜の奉行に命じ一城廓と經營せしむ諸勝家當城  
お在任し北陸七國と追々に切取べしと仰せ有に柴田が威權是  
より盛大して流石織田家隨一の老臣と諸將も敬ぶるに無りたり

次は丹波國と備前國に切隨いませと指揮し給ふ丹後國ハ  
舊來一色義定の所領とせざる國を今般越前退治に馳加り  
て戦功軍忠感まへして本領安堵と仰せ渡され兩丹進軍の案  
内者となり明智に力と戮まへしと命せらる恁て大將信長卿は  
は九月廿三日北の庄と立せし廿六日岐阜城に還軍有る信長  
年來門徒の狼籍と深く惡し居給ひしは勢州長嶋の門徒及  
び江越の門徒一揆悉く數限りなく誅し給ふ穉頗暴戾して生  
と損ひ殺と好むの不仁の行狀桀紂と雖も亦惡と讓るべし然れ  
共一揆も罪平しと謂はる是正しく天の然らむる處をん茲  
ふ今般一揆の總大將下間筑後法橋なる者前に今庄越前南條郡の宿に



越前下野  
 村小下間  
 法橋主從  
 七命ふと  
 圖





打て出火打山と詰めの城に構え要害堅固に備へて鉾崎の祐海志  
津の了珍南居の正船本田の明圓真粟の瑞性江守の丸形等と先  
として丹生郡今北郡南條郡の郷民們と先は朝倉殘黨浪士  
以下其勢分配して揃籠れ共惟任縮葉に攻詰られて或は討れ  
虜らるるも辛くも介躬の城と脱出山林に逃入躲れ忍び織田家の穿  
鑿嚴しければ深山の奥まで探索あれは容と替て遁れ去んと郎等富  
長と云る者諸共非人の姿を躬と省して十月上旬府中の辺より下  
野村と云る地に吟ひ来て主従辻堂に入て一夜と明く如何もして當  
國と遁れ奔り攝州石山へ取りつとて晝は潜みて夜は走りたり此  
辺四五箇村の往古より高田專修寺派の門徒にて年來本願寺と

不和の間之故に今般の揆れ與せを此村中の農夫の者に下間筑  
後と見識者あり辻堂に卧憩ふと首付と高田派の門徒宗多黒  
目村稱名寺へ告りりる元來偏執懐き一專修寺門徒より曳  
方織田家の怨敵配府の廻つて肖像者得てを介儘遁をべらむと坊  
主天窓に鉢巻も耳に留つて落人かれは黒目村下野村野中村米  
納津村等の高田派門徒と呼集り一揆の張本下間筑後堂を把  
ち逃れおせると四箇村寄て百人許り面々鋤鋤竹鎗引提件此辻  
堂へ押懸つて辻堂四方より取圍て遁れまどとて闖きたり下間  
主従大きお驚き今は是れと覺悟と究て枝に仕込し利刀引抜  
踊り出つて前に進み農夫四五個斬倒せば郎等富長も主に劣む

懐及引拔防ぎ支へど主従兩個の外援助もなく篠突如く竹鎗に  
防ぎ兼るる下間筑後の二鎗腹刺れて仰反伏す郎等富長惚り  
つづ傍の速川へ飛入て遂に水に溺れて死しつたり稱名寺住  
持觀比勇之當國の守護職と定まる北の庄柴田修理進勝家元筑  
後首級と斬て差出しければ勝家即時に毛受勝助と以て筑後  
が首級と岐阜へ送り信長卿の實檢一備へし信長御感賞ま  
しめて稱名寺へ下を感狀の勝家より遣はせしと有依之  
今般下間筑後法橋被討捕忠節無比類候其方門徒歸  
參人等不可有別条之狀如件

天正三年十月十八日

修理進勝家

高田門徒黒目村稱名寺住持

越前國中門徒の僧俗信長の為塵と成て戰場に討る者一万  
三千七百餘人狩殺さる男女幾万と知を既に門徒の人種盡て  
下間筑後法橋にも着附出されて討れつりと追々石山本願寺  
を注進あまに御門主始り上下の僧俗悲哀の聲の蚊の哭如  
く夜叉羅刹の暴惡なりとも信長程に酷くは有やと諸も情  
あま愁世うあやて愈御開山の御勸め五濁惡世此人心狼惡思  
ひ的りて南無阿弥陀佛携り外憑とありと上人十念授け  
給へ僉々恐怖心と把直して拝承讚嘆して授りて鬼の信長來  
らぬ來れ信心獲得の楯と以て追退けて置べきやと倍々金剛心茂

石山軍記 第二編 卷之五  
（二二）  
ぞ極きまり居いゆ

えんいしやぬぐんきぶいよぶんのだんご  
繪本石山軍記第二編卷之五終

